

久橋村
保村松
田和友
敏紀次
子編

芭蕉詩書集

一

村松
久保村
田和友
敏紀次
編

芭蕉詩集

古
典
文
庫

昭和五十八年七月二十日印刷発行

非売品

編者

村松友次
橋村和紀
久保田敏子

発行者

吉田幸一

芭蕉伝書集

一

印刷者

帝都印刷製本株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一四五九七番

目次

誹諧三部書 全（凡例・翻刻）	三
（一）誹諧之秘記	七
（二）袖珍抄	三
（三）本式並古式	七
芭蕉翁二十五箇条夜話（凡例・翻刻）	五
解説	三九
『誹諧三部書』	三九
村松友次	三九

1	書 誌……………	二四一
2	書名について……………	二四七
3	先行する翻刻書……………	二五四
4	本書の性格……………	二五五
5	岩瀬文庫蔵『俳諧伝授』について……………	二五七
6	岩瀬文庫蔵『俳諧伝授』よりの摘記および本文校異……………	二六〇
	『芭蕉翁二十五箇条夜話』……………久保田 敏子……………	二六一
1	書 誌……………	二九一
2	『二十五箇条夜話』について……………	二九三
3	『二十五箇条』について……………	二九六
4	芭蕉翁二十五箇条夜話 校異……………	三〇〇

誹諧三部書全

凡 例

一 宝曆九年刊『俳諧三部書 全』（橋村和紀架蔵）をなるべく原本の体裁のまま翻刻した。

二 原本にはふりがなが付いているので、その通りにふりがなを付け、私には一切付けなかった。仮名づかいの誤りもあえて正さず、そのままとした。

三 句読点のみを私に施した。

四 旧字体、異体字、変体仮名等は、一部原本通りの場合があるほかは、大部分現行のものに改めた。

五 「解説」のあとに、岩瀬文庫蔵『俳諧伝授』（内容は『俳諧三部書』の注解よりその注解の摘記および本文校異を記した。くわしくは「解説」を参照されたい。

六 原本よりの翻字は橋村和紀が担当し、校正は橋村・村松が担当した。

(一)

誹諧之秘記

誹諧秘記はいかいひき一書 百韻ひゃくいん四十四哥ししつか價せん(ママ)さりきらひむ 去嫌夢相そうそのほかひ其外秘ことする事ともいたす

袖珍抄しうちんしやう一書 発句はくく十八の切字きれじ其外手そのほかて尔葉にはの傳來でんらいをことく(ママ) 委ことく(ママ) クあらハす

本式古式ほんしきこしき一卷 誹人はいしんせき席のそに望のそむとき心こころ得えるへき事ことを記きす

誹諧三部書全

浪花書林

文栄堂

翰林堂

文観堂

誹諧之秘記

誹諧傳といふ事世に周く多し。予年来一道に煩ひ、氣力を盡す。神に託、因縁を尋て、時々妙あり、語事なくいひ放すにあらず。吾俳師としたる人五人あり。師にして師とせず。俳諧に成就の時日有。只差合くりと云れんよりハ、句者と云れんこそ成就の本意、此境尤專要外なし。御傘に有りといひ、亦見あたらすなど、老宗匠の云稀くあり。芳席の不興浅まし。貞徳まつたく御傘ごときに本心をくだかず。道の草の鎌成べし。なを一座の了簡專要と書たる高情心をとめぬこそ本意すくなし。てにをはは、姉小路殿の一卷添物なり。堂上の面々各々此てにをはの外なし。誹諧ハ日本のはいかいなり。口

受法じゆほふを知らずして、宗匠そうしやうと呼よぶに答こたふ人、腹はたいたしといふも諫言かんげんなり。

はせを

誹諧はいかい之秘記ひき

ㄱ 本式表しきあもて ㄱ 恋ハ不レ入 ㄱ 神祇じんぎ ㄱ 釈教しゃくけうハ発句はつく ㄱ 月雪 ㄱ 花

ㄱ ほとゝきす ㄱ 名所 ㄱ 寐覚ねざめ 如レ此

世よに表おもて十句ハ、知し人ひと多おほし、裏うらの詮義せんぎ無沙汰ぶさたなり。

ㄱ ウラハ古法こほふ二句也。秘也。此二句に恋こひを入いるべし。今首尾いましゆび之吟のぎんとて

表おもて六句裏うら六句するなり。自然しぜん古法こほふの表裏かすの数かずにかなひたる事道さちの天然てんねん

なり。

三ッ物み之事もの

天地人てんちじん之三ッ也。歳旦さいたんは、天意あもつとも尤もつともよし。脇わき尤もつとも地理ちりなり。第三尤だいさんもつとも

人意なり。此心得たる上へ、いか様とも自由有べし。歳旦にかぎり
三ッ物といふは、三ノ数火の形チ、則陽を貯る祈禱あり。

ㄱ 歌仙三十六ノ数ハ

ㄱ アナニエヤニエヤウマシヲトコニアヒヌ 十八

ㄱ アナニエヤニエヤウマシヲトメニアヒヌ 十八

ㄱ 百韻といふ事

百句ト成とも百詠百吟などいふべきを、いかに韻トハ申ぞ。不思議
可レ申様なし、知人なし。俳諧之大事是なり。此数詩を以割タル数に
て雪月花之用所明かなり。

ㄱ 表八句 裏十四句なり。裏十六句ト数ヲ定ムべきなり。律詩
絶句ノ姿ノ数也。

仍テ表ノ趣 おもむき

ㄱ起請轉合 きしやうてんがふ 四句メ迄五句メヨリ

ㄱ起請轉合 つきざてん 月ノ座轉ノ場也

裏ノㄱ月花の座算候へば、起敷轉の所へ極メてあたる也。再熟甘心

不レ少、仍韻ノ字済なり。

ㄱよゝしの事 無別条一。五十韻ハ半韻とて不レ好 このま

ㄱ祈祷の誹諧之事 くじゆ 口受

ㄱ誹ハ俳也 カヘシハイハヒ 也 仍、古今にもいづれの字用てもくるしから

ずと、宗祇文庫書に委細あり。清輔の不審と書たるは、是以不念

也。

ㄱ誹ノ六義ハ連歌に預からず歌道六義也

△風ふう

「そへうた也、よそへよめるなり。」

定家ママハ色いろの見えぬを其品物そのしなものよせ合てあらはるゝなり。

△賦

「本意也。鋪也。故かるがゆへに賦をかぞへ哥うたと云也。賦ハ量はかるなり。」

△比ひ

「なずらへ也、たくらべとも。物の物に似たる也。」

譬喩也。
タトヘ

△興けう

「たとへ也。そへ哥うたとは顯藏之違けんざうのちがひアリ。似たる事にて少違すこしちがひ也。」

▽雅が

「物の成就しやうじゆして調とよのふたる躰ていなり。たゞこと歌うたなり。言雅意雅げんがゐが

アリ。意雅ゐかハ治定ちてうナキ躰ていなり。言雅ハ言葉ことばにあらはして一句いっくヲ

作つくル也。雅がハたゞしきなり。」

▽頌しやう
じゆ

「いわひ哥うた也。世よを普神ほかみに告つぐる也。祝義しうぎ也。つき出して褒美ほうびし

たるハ、讃頌さんしやうノ躰てい也。只神明ただしんめいに告つぐる心こころ。奉納ほうのふ発句はくに入躰いれてい也。